

アマモを移植するボランティア＝大阪府岬町のせんなん里海公園、小林裕幸撮影



なにわの海 アマモ再び

「海のゆりかご」といわれ、かつて大阪湾内の各地に自生していたアマモを移植して再生する取り組みが広がっている。アマモは水質のきれいな砂泥地に生える海草で、生き物の産卵や育成の場のほか水質浄化の役割を果たす。

移植は6年前にNPO法人環境教育技術振興会(大阪府松原市)のボランティアのダイバーと大阪コミュニケーション

アート専門学校(大阪市西区)の学生らが始め、昨年から、日本分析化学専門学校(大阪市北区)の学生たちが参加。自生しているアマモがどんな底質を好むのかを調べ、効果的な移植法を探っている。メンバーが近隣の泉南市や岸和田市などの小中学校などに出向き、環境学習としての苗作りや観察会も開いている。これまでに約20校が参加し、3月半ばには、岬町のせんなん里海公園で岸和田市内の7校の小中学生が育てた苗100株を植え付けた。(伊藤恵里奈)